

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770080

研究課題名(和文) 出版メディアを基盤とした江戸板浮世草子・俳諧及び作者の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Print Media-based Research on Edo Ukiyo-Zoshi, Haikai, and Their Authors

研究代表者

速水 香織 (HAYAMI, Kaori)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：60556653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：近世前期に成立した文芸は、出版メディアの著しい発達に大きな影響を受けていることをふまえ、当該時期に三都において活動していた出版書肆、特に長期に亘って活動していた江戸書肆に関する調査を継続して行った。これらが扱う出版物のうち、江戸板浮世草子を取り上げ、舞台設定の意図および話中に見られる諸要素の分析を行った。

また、元和-元禄期に亘って、継続して奉納された連歌俳諧資料(深志神社蔵)の調査から、当時における中央と地方との、文芸的な交流の実態についての分析を進めた。

研究成果の概要(英文)：Literary arts that came into existence during the first half of Japan's early modern period were considerably influenced by the pronounced development of print media. In light of this, I carried out a survey regarding publishers in Kyoto, Osaka, and Edo from this period, focusing on the Edo Ukiyo-zoshi published by those that were active for a long period of time in Edo. I analyzed the intentions behind their settings as well as the elements found in their stories.

Additionally, based on a survey of renga haikai (collaborative linked verse poetry) materials that were offered from the Genna to the Genroku period (held by Fukashi Tenjin shrine), I analyzed the artistic and literary exchange between the center and provinces during this time.

研究分野：近世文学

キーワード：出版文化 浮世草子 俳諧 江戸本屋仲間

## 1. 研究開始当初の背景

日本文学は、近世前期において、出版文化を基盤として急激に、しかも著しく大衆化した。中でも、井原西鶴『好色一代男』(天和2<sub>1682</sub>年刊)以来、上方に流行して江戸へ伝播し、三都において約100年に亘り陸続と生み出された浮世草子、また京から大坂、江戸ともネットワークを繋ぎ、全国的に広く愛好された俳諧は、現代にまで続く日本の大衆文化発展の重要な基盤となった。

これら庶民文化発展の源流となった浮世草子並びに俳諧を初めとする文芸は、主に三都に発達した出版文化の中で販売、あるいは配布により流通し、それ以前と比較して飛躍的に作品内容の伝播速度を速め、作家が互いに影響を及ぼし合う状況を生み出した。いわば出版文化は文学作品創出・流通・享受の基盤となった要素であるが、出版活動が作家活動に与えた影響、また上方出版界と江戸出版界との相違及び両者の交流の実態解明は、ながく未整理未解決の課題となってきた。とりわけ、三都の出版界が、西鶴浮世草子を契機として他地域との取引を一般化させる貞享・元禄期(1688-704)における江戸出版界についての研究が手薄となっている。

江戸書肆は、常に上方書肆との密接な関係を保ち、上方出来の浮世草子や俳諧書を江戸で旺盛に売り出すと同時に、江戸で独自に成された文学作品出版の担い手となって作者の執筆活動を支えた、当地の文学作品創出に不可欠の存在であった。しかしながら、当時の江戸は上方からの文化を摂取することを主とした文化的後進地域であるとの前提により、当地において生成された文芸の基盤ともなる江戸出版文化の研究は進展が立ち遅れた状況に置かれている。

三都の出版ネットワークの具体像を構築し、その中に生成物としての作品を位置付けてゆくことは、すなわち大衆文化生成の過程を明らかにし、江戸と上方とを繋いで近世前期から後期にかけての総括的な文化史の構図を描き出すことへと通じる。このようなメディアによる文学作品、ひいては文化の伝播形態についての研究は、日本のみならず海外においても盛んになりつつあり、個々の作品研究の深化に加え、その流通を支えるメディアの研究は、今後巨視的な観点からの必要性を高めてゆく分野でもあるといえる。

以上の観点から、元禄期を中心として活躍した三都出版書肆の実態調査、そしてそれらの手により刊行された出版物、特に浮世草子、俳諧、また恒常的に高い需要のあった実用書等の書誌調査を行い、作品相互の関係性、あるいは作品・作家に対する書肆の影響関係を解明する必要性を認識するに至った。そこで

報告者は、手薄となっていた当該時期における江戸出版書肆の関係する出版物を文学作品に限らず網羅的に調査し、当地において大きな発展を遂げるには上方書肆との密接な交流が必要条件であったことを明らかにし、さらに長期に亘って活動した江戸書肆を複数調査することにより、当初各書肆が個別に保っていた上方との交流は、正徳末年から享保年間にかけて、幕府の意向を汲む形で江戸出版界から慎重な姿勢をもって図られるようになり、これが文学作品の出来に影響を及ぼしていたことを実証した。

これらの成果をふまえ、江戸と上方との地理的条件、また文化的格差をも意識し、先品・作家・書肆の相互関連性についての考察を進めるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、貞享・元禄期の江戸において成立した諸作品を取り上げ、その生成過程ならびにメディア影響関係を明らかにする。作者の文芸活動とその生産物としての作品を、三都で飛躍的に発達した《出版文化》というひとつの枠組みと関連させることにより、江戸における大衆文化生成の過程を解明することを目的とする。

具体的には、従来言及されることの少なかった貞享・元禄期成立の江戸板浮世草子を取り上げ、その内容分析を通じて上方文学摂取の様相を明らかにすると同時に、作中に見られる江戸独自の要素について考察を加えると共に、メディアによる地域を跨いだネットワークの中で、相互に関連する作家と作品との実態を明らかにする。

加えて、江戸板浮世草子作者は、同時に俳諧師あるいは絵師としても活動していた例が少なくないことから、同時期の当地における俳諧活動の実態についても調査を及ぼし、作者の文化活動とその生産物としての作品を出版文化と関連づけ、元禄期の江戸における大衆文化の具体像を構築することを目指す。

## 3. 研究の方法

研究の目的を達成するため、主に以下の点について調査研究を進める。

現在までに研究代表者が行ってきた三都出版書肆、特に江戸書肆の出版物に関する調査を継続し、近世前期における江戸出版文化研究のさらなる充実を図る。

1) 具体的には、既に調査を進めている、当時の江戸において浮世草子ならびに俳諧を取り扱う者を中心に、10年以上の出版活動が認められる書肆(松會三四郎、西村半兵衛、

万屋清兵衛、鶴屋喜右衛門、川勝五郎右衛門、山口屋権兵衛、御簾屋又右衛門、須原屋茂兵衛、出雲寺四郎兵衛、近江屋久兵衛、平野屋吉兵衛)についての調査を進める。

2)そして、これらの書肆が手掛ける貞享・元禄期の江戸において流通した江戸板浮世草子の、上方板浮世草子との内容的な関連について検討する。このため、江戸書肆と密接に連動しながらこれまで調査が手薄であった上方書肆(菊屋喜兵衛並びに七郎兵衛・柏原屋清右衛門)についても同様の調査を及ぼす。

貞享・元禄期前半までの江戸では、西鶴本浮世草子は万屋清兵衛が、西村本浮世草子は本屋作者である西村市郎右衛門の江戸出店・西村半兵衛が、それぞれ独占的に売出しているが、万屋・西村は、それぞれが独自に上方書肆とのルートを確立しつつ江戸においても関係を保ち、極めて広いネットワークを構築していたことに加え、二軒ともに上方板俳書の売出を担いつつ江戸では宝井其角の俳書を多く刊行しており、その出版ネットワークの上に江戸俳壇をも位置付け得る書肆である。

ここから、上方板浮世草子が江戸で享受され始めた天和年間末期から刊行されている石川流宣、及び松月堂不角作浮世草子を取り上げ、当時上方板浮世草子を代表する西鶴本・西村本との関係について考察する。例えば、石川及び不角作浮世草子(貞享41687刊『色の染衣』他)には、和歌の引用手法等、本文中に西村本と類似した部分が見られる一方で、上方板に先行して武士が主人公となって衆道を恋の妨げとする内容の話が描かれるなど、江戸板浮世草子は上方板と文体・内容的に相互に関連している。両者の類似した趣向に対する意識の相違、また特徴的な場面の描写における相互的な享受および影響の具体的様相について考察する。

の作業と並行して、江戸浮世草子作者を中心とした俳諧活動についても調査を行う。

1)具体的には、まず蕉風確立以前から江戸の俳諧点者として活躍した立羽不角の文芸活動を総合的に調査する。貞享・元禄期から宝永年間(1704-1711)までの不角の俳風は江戸風として上方にも認知され、其角の洒落風を誘発するなど、早くから江戸独自の新風を打ち出したことで知られるが、この俳諧活動と、その只中に継続して出版された不角作浮世草子との発想点や表現上の関係は未だ言及されていない。そこで貞享41687年刊『色の染衣』及び元禄41691年刊『好色染下地』を取り上げ、前年度に引き続いて内容を精査した上で、不角の俳諧活動との関連について検討する。

2)さらに、出版書肆を基軸とした、江戸における俳諧ネットワークの実態についても考察する。この際、京都や江戸で形成されていた俳壇と、地方との関連をも視野に入れ関係資料を調査してゆく。

#### 4. 研究成果

近世前期(特に寛文から宝暦期まで)における、「3. 研究の方法」に挙げた各書肆の動向を確実に把握するため、先行研究を参照しつつ個々の活動調査を行った。具体的には、松會三四郎、西村半兵衛、万屋清兵衛、鶴屋喜右衛門、川勝五郎右衛門、山口屋権兵衛、御簾屋又右衛門、須原屋茂兵衛、出雲寺四郎兵衛、近江屋久兵衛、平野屋吉兵衛等について、当該時期の刊記を有する出版物の調査を行い、これらを一覧として年表化した。さらに、これらの出版物が江戸書肆単独の出版によるものか、他書肆と連名によって刊行された物であるかについても調査すると同時に、連名となる書肆の活動地域を把握し、上記の江戸書肆が、同時期に浮世草子を扱いつつ活動していた上方書肆と築いていたネットワークの具体的な様相について分析を進めた。

上記の調査を進める中で、宝永期から宝暦期にかけて、三都においてしばしば刊行された東海道・中山道に関する情報誌の出版状況及び内容に着目し、各書に盛り込まれる情報の出典ならびにその影響関係について考察した。その結果、内容的な特徴から、道中記には、重板・類板の危険が宿命的に付き纏うが、これを回避するため、江戸書肆は「情報誌であるにも係らず、先行書と意図的に内容を違える」もしくは「先行書の板権を持つ上方書肆を予め取引先として出版事業に参入させた上で、先行書の情報を効果的に摂取・利用する」といった方策を取っていたことが明らかとなった。また、特に後者の方策を採り得るか否かは、本屋同士の個人的な関係性に大きな比重が置かれており、この関係性は貞享・元禄期における交流に端を発する、すなわち長期に亘る信頼関係の醸成によるものが多い事を指摘した。

また、西鶴没後の元禄10年代に関して、江戸書肆万屋清兵衛の活動について上方出版界との係わりを中心に考察した。同書肆は元禄10年頃から比較的大部な漢籍の和刻本を、概ね単独で出版する事例を増加させており、そのひとつである『孟子』(大本4冊)を八文字屋と連名で出版しているが、これはその刊記情報から、万屋清兵衛が主導的に出版を計画した可能性が高いと結論付けた。

上記の調査に関連して、万屋・八文字屋板『孟子』は板面の状態から、京都出来かとも目され、ここから同書は万屋ではなく、八文字屋の主導により出版された可能性も指摘されてきたが、万屋板漢籍ならびにその先行書と思しき上方出来の印本との比較調査か

ら、元禄期から享保頃に刊行された万屋清兵衛の出版物、特に漢籍や実用書は、京都板の復刻版である可能性がきわめて高いことを突き止めた。すなわち、京都書肆から漢籍等の板権を入手しても、これをそのまま用いるのではなく、元板から新たに板木を作成し直して出版しているのであるが、板面ならびに寸法の状態から、これは1670年代以前に、松會らによって行われていた、いわゆる江戸板とは異なり、元板のほぼ忠実な複製であることを明らかにした。

さらに、同時期の江戸出版界は、取引先となる上方書肆に対し、特定の江戸書肆が取引を行う、すなわち競合するのではなく、いわば棲み分けていた状態にあったらしいことを指摘した。

また、上記一連の出版活動調査を実施する中で、これまで明らかとなっていなかった菊屋喜兵衛の、明治以後における動向についても若干の知見を得た。これらの情報に基づき、今後は同書肆ならびに関係する板元の調査を、明治以後にまで及ぼすことが可能となった。

上記の調査と並行して、特に江戸において刊行された江戸板浮世草子についても内容面からの分析を進めた。具体的には、1600年代前半から、江戸浅草は既に所謂「観光地」として意識されているが、例えば不角作『色の染』『好色染下地』など、複数の江戸板浮世草子の重要場面に「浅草の観音に参詣する」場面がしばしば登場するのは、浅草が他地域においても名所として知られた土地であったことが意識されていた可能性について、縁起・怪異譚等に見られる同地の情報なども参照しつつ考察を進めた。

さらに、近世前期における誹諧資料に関する調査として、松本深志神社蔵奉納連歌誹諧資料の調査に着手した。同資料は、天神信仰の一環として、近世初頭から元禄期の約100年間に亘り、松本藩士らの手に成った連歌が深志神社に継続して奉納された経緯を持つ資料群であるが、内容的には、京都俳壇及び江戸俳壇双方からの影響を受けて成ったと思しく、中央と地方との交流の一端を示す資料として貴重である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

速水 香織、「中山道関連書籍の出版に見る三都本屋仲間の相克」、『国語国文』86-1号、査読有り、2017年1月、pp.18-26

速水 香織、「『好色五人女』巻二における「ぬけ参り」の意味」、『皇學館論叢』48-6号、査読有り、2015年12月、pp.1-26

### 〔学会発表〕(計 2 件)

速水 香織、「元禄末年の江戸出版界と上方浮世草子」、東海近世文学会平成27年度9月例会、査読なし、2015年9月22日、於熱田神宮文化殿(愛知県名古屋市)

速水 香織、「『岐蘇路安見絵図』の出版と宝暦期の江戸出版界」、皇學館大學人文學會第8回大会、査読有り、2015年7月5日、於皇學館大学(三重県伊勢市)

### 〔図書〕(計 1 件)

柳沢昌紀責任編集、速水 香織、東京堂出版、『仮名草子集成』第58巻、2017年(刊行決定)

### 〔その他〕

速水 香織、「江戸時代の出版文化の広がり」と宣長」、本居宣長記念館主催夏の特別展「ホンと！宣長」関連講座、2014年9月7日、於本居宣長記念館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

速水 香織 (HAYAMI, Kaori)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授  
研究者番号：60556653